



International Year of Disabled Persons
Theme : Full Participation and Equality

こぼればなし

郡山盲・聾学校長を最後に一線を退いた海野昇雄氏は、研究に余念のない生活をおくられている学識者である。昨年氏の手を経て「教育福島」十月号が、中国の旧友郭 人奇氏におくられた。「教育福島」十月号といえば、巻頭言は佐久間 敏氏にお願いした「身勝手」である。

このほど、郭氏からの返事が海野氏に寄せられたが、その中で郭氏は、巻頭言に、

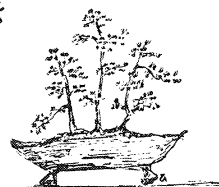
「……文章の主題によって、非常に普遍的な意義をもつ『道徳観』を提起しています。非常に大なる啓発を与え、非常に大なる教育を感じます。この文章は、微塵も『説教』はなくて、かえって教育の目的を達しています。この文章から佐久間 敏先生の人柄がうかがえます。私は今、この文章を伝新に勉強させ、自分の力で訳させています。(海野氏訳)」と述べている。

息子の伝新氏に訳させているとは、恐れ入ったことだが、「教育福島」が海を渡ったといったら大げさで手前味噌になるだろうか。

海野氏は、日本と中国の文化交流のパイオニアであった鑑真和上に関する「唐大和上東征伝」の現代語訳を郭氏との二人三脚で完成させたが、今春四月、「鑑真和上を慕う会友好訪華団」として、中国を訪れ、郭氏とも再会の予定であるという。因みにこの訪華団は、団長に佐久間 敏氏、秘書長海野昇雄氏、三本杉國雄氏も参加すると聞く。三本杉氏は、会津短大学長であるが、「教育福島」が現在のスタイルになった当時の県教育長。とくれば、なにか「教育福島」が因縁めいてくる。諸氏の訪華中、「教育福島」ならぬ教育県福島の話題をも期待したいところである。

ともあれ、豊かな実りある訪華をと願う。

あとがき



○ 今年度は、思わぬところで大雪に見舞われた。自然には逆えないとはいいながら、なんともやりきれない気持ち、というのが本音であろう。

○ といって、嘆息から発展は生まれてこない。「雪は鶴毛がらみに似て飛んで散乱し人は鶴髻がらみを被て立って徘徊徘徊す」ということもあるのではないかと。もつと前を直視してと思う。

○ 三月は卒業のとき。文字通り、螢雪の功なつて、多くの児童生徒が巣立つ。豊かな未来を……。

○ 雪で思い出されるのが、幼い日の雪ダルマづくり。掌の小さな玉がやがて、大きな雪ダルマに変わっていく。

○ 児童生徒の夢も、八〇年代スタートの年を迎えて、雪ダルマ式に、大きくふくらませてやりたいものである。

(ひ)